
【研究論文】

Input for Outputを意識した英語多読実践報告

－英語学習者の多読・音読・自己表現活動に関する調査より－

阿部 雅也
Masaya ABE

Abstract

コロナ禍における英語授業でインプット、アウトプットが不足しがちな傾向が続いている。本研究では筆者が運営する英語基礎科目で行っている多読・音読・自己表現活動にフォーカスした実践を報告し、大学生の多読状況や音読速度テスト、アンケート結果などのデータから、効果の検証を試みる。

キーワード：Extensive Reading, Xreading, オンライン多読, 音読, 自己表現

1. 背景

英語教育界において多読が注目を集めてから久しいが、日本の中学・高校で英語を外国語として学ぶ際、検定教科書で読む英文の総語数は3万～3万5千語程度とされる（長谷川他, 2018）。和泉（2009）が指摘するようにインプット量の不足は明らかで、中学・高校・大学と精読に偏った指導の結果として、読みの流暢さが欠如し、日本語には訳せるがその内容を適切に理解していないといった学習者が現れることが懸念される。多読指導は日本の英語教育において近年盛んになってきているが、多読によって読解力がどれくらい向上したのか、精読と合わせてどのように評価していくのかという点で難しい。

筆者が所属する新潟経営大学経営情報学部では1・2年次生の必修科目において4技能を統合した実践的なコミュニケーション能力を育成することを目指した科目を開設している。だが、昨今のコロナ禍における授業では対面・遠隔を問わず、教師が授業運営の工夫をしない限り、言語活動を中心としたコミュニケーションの中でのインプット、アウトプットが不足した状況に陥る可能性が十分にある。上記のような状況下で、筆者が運営する英語基礎科目では2020年度よりオンラインの多読教材を取り入れ、多読・音読・自己表現活動にフォーカスを当てつつinput for outputを意識した授業を展開している。そこで本稿ではそれらの実践を紹介し、学生の多読状況や音読・自己表現活動に関するアンケート結果などのデータから、実践の効果について考察する。

1.1 多読

多読とは学習者自身の實力にあった本をできるだけ学習者が自分で選び、自分のペースで数多く読む活動である。多読活動によって、学習者は「理解可能なインプット」(Krashen, 1982)を十分に受け取ることが可能である。SSS英語学習法研究会や日本多読学会では楽しみながら本を数多く読むことで、自然に単語や定型表現に慣れ親しみ、偶発的に言葉を習得することの重要性を強調しており、多読3原則(図1)が示されている。高瀬(2010, p.180)も、多読を強要することなく、強く励ます(strong encouragement)ことを重要としている。

中学校のある検定教科書と多読図書の語彙の出現頻度を、語数カウントによって比較した偶発的語彙学習の可能性に関する調査(大槻・高瀬, 2014)では、中1～中3の初期・中期・後期段階において、検定教科書での同一語彙の出現回数が3.6、3.7、3.9回だったのに対して、多読図書では4.8、10.3、11.5回とレベルが上がるにつれて飛躍的に増えており、合計で3倍近い出現頻度となっていることを報告している。大学においても精読用のテキストだけでなく多読を通じて偶発的に何度も語彙や表現に出会うことで、自然な形で習得に向かうことができるだろう。

- | |
|---|
| ①辞書は引かない
②わからないところはとぼす
③あわなくなったらやめる |
|---|

図1 多読3原則(SSS多読研究会)

1.2 音読

英文読解力は、TOEICや英検など黙読による理解度を設問によって評価するのが一般的だが、一方、音読速度の測定によって学習者の力を間接的に評価し予測できるという見方もある。読解のメカニズムについては、シンプル仮説The Simple View of Reading(Hoover & Gough, 1990)などに代表されるように、解読能力(decoding)と理解能力(comprehension)とに分けて考え、読解力の向上を読解過程での音韻符号化や意味表象の自動化によるワーキングメモリ保全によるものとする見方がある。学習者がインプットを取り入れ内在化していくためには、統語処理や意味処理といった上位スキルだけでなく、音声知覚、音韻符号化、語彙アクセスといった下位スキルの習得が必須となる。門田(2007)は音読をそのようなスキル訓練の有効な手段の一つとし、音読によって単語認知の自動化が促進されるとしている。国内の研究を例に取ると、宮迫(2002)は音読力と英語読解力の関係を検証した結果、音読速度(1分間に音読できる総語数)と英検筆記試験の成績に高い正相関が見られたと報告している。また、飯野(2006)は音読と多読を併用した指導を長期的に行なった結果、読解の基盤となる音韻知識と単語認知の自動化が強化されたとしている。

1.3 自己表現活動

与えられたインプットを自由にアウトプットで活用できるようになるには多くの時間と練習が必要であり、その意味で小学校から高等教育まで一貫して、4技能5領域を統合したコミュニケーション能力を育成していくことが求められている。和泉(2011)は、第二言語の習得はインプット、インテイク、中間言語体系という3つの段階を経つつ、中間言語体系に蓄積した要素を総動員してア

アウトプットに向かうとしている。だが、現状の問題点として、授業が内容理解（インプット）や練習としてのインテイク活動に偏り、コミュニケーション中心の自己表現活動（アウトプット）が不十分になってしまう傾向がよく見受けられる。多くの研究によって、コミュニケーション能力を向上させるためには、理解可能な多量のインプットを、自己表現などのアウトプット活動に向けて設定する重要性が指摘されている（中嶋, 2017; 斎藤, 2008）が、前述の筆者が担当する英語基礎科目においても、コロナ禍の影響で十分なコミュニケーション活動が行えていない現状があった。

2. 本研究の目的

これまでの議論を受けて、本研究では筆者が2020年度から導入している多読・音読・自己表現活動の実践にフォーカスを当て、学生の多読状況や音読速度テスト、アンケート結果などのデータから、効果の検証を試みることを目的とする。オンラインプラットフォームのLMS（Learning Management System）を取り入れinput for outputを意識した授業実践について説明し、多読や音読、表現活動が英語読解力の育成に効果があるかについて検証する。

3. 本研究における授業実践

3.1 対象

授業は、新潟経営大学経営情報学科1年次生（2021年度）を対象とする必修科目「ジェネラル・イングリッシュⅠ（初級）」、及び「ジェネラル・イングリッシュⅡ（中級）」受講者の71名である。4月のプレースメントテスト（本学独自）で4分割して授業を習熟度別に展開している。授業は週に2度行っており、前期の授業期間は4月8日から7月29日までの計30回である。対象者の英語力は数名が英検3級～準2級を持っており、英語学習へのモチベーションが高い。それ以外の学生については、英語は特に得意ではないが、話す・聞くといったコミュニケーション能力を中心に、技能を伸ばしたいと考えている者が多い。

3.2 授業のねらいと現状

本研究が対象とする授業では、具体的な場面を想定した実践的コミュニケーション力やそのための基礎スキルを身に付けることによって、生涯にわたって学習し続ける自律性、及び学んだ英語を実際の場面で使ってみようとする意欲や態度を育成することをねらいとしている。コミュニケーション力中心の到達目標をシラバスに設定して授業を展開しているが、コロナ禍の影響でそのような活動が十分に実施できていない現状であった。そこで、学生が理解可能な多量のインプットに触れられるように、一般的なテキストに加えて、オンラインの多読教材であるXreadingを採用し、input for outputの授業デザインとなるよう工夫した。

3.3 授業環境

3.3.1 統一シラバスによる指導体制の確立

ジェネラル・イングリッシュ I・II（必修科目）において、同じ科目を横並びで担当する教員とシラバスを共通化し、到達目標と評価規準を揃える一方で、授業方法は阿部（2021）を参考に担当裁量とすることで一枚岩の指導を実現している。筆者の担当するクラスの授業を他の教員の授業に先行（付録 8.1 参照）させ、授業を動画撮影し、各担当が授業動画を適宜自由に活用した対面授業を展開している。その授業動画と他に作成した教材をLMSに保存することで担当者間で共有（3.3.2 参照）し、チームで学科の学生全員を指導する体制を確立した。この体制は、2020年度、コロナ禍対応での遠隔授業のための環境であるが、対面型においても有効に機能するため、2021年度以降も継続して活用している。半期ごとにクラス替えをする習熟度別のクラス編成とし、2・3年次の留学や資格試験合格に向けて徐々にレベルアップできるようカリキュラムをデザインしている。指導過程で英検やTOEICなどの外部資格試験共通のスコアであるCSE（Common Scale for English）に基づいて合格可能性の判定ができるよう、日本英語検定協会が実施している診断テストを取り入れて本試験の受験を促し、受験者、合格者数ともに伸ばしている。また、学生の学習状況や成績の伸びについて、頻繁に情報交換しながら、授業運営方法を相談して進めている。その結果、以前の授業アンケートでは学生から不満として出されていたとされる、クラス間の不平等もなくなった。

3.3.2 オンラインLMSの活用による指導の効率化、および指導と評価の一体化

LMSを有効活用して、常勤・非常勤の教員が同じコンテンツを共有しながら協働できるシステムを構築することで上記の指導体制をさらに強固で効率的なものにしている。具体的には授業動画を筆者が作成し、読解後のペアワークで使用する発問や小テスト、評価ループリック付きの面接テスト、受講後の課題などのGoogleフォームをGoogleクラスルーム経由で時間指定して投稿する。それらのコンテンツを他の担当者にも共有し、適宜再利用してもらいながら、学生へのフィードバックなど直接的な指導を各クラス担当の裁量で行う仕組みである。各担当者は学生の提出物の誤答分布などを提出直後に画面上に示したり、対面でのパフォーマンステストへの評価やライティングへの添削コメント、モチベーション維持などのフォローアップをしたりする。

この取組はコロナ禍への対応から始めたものであり、2021年度で2年目を迎えている。授業動画や課題、テストなどのコンテンツは少し手直しする必要はあるものの、活動ごとのモジュール動画を保存管理することで年度を跨いで活用できており、指導の一貫性向上や精緻化、アクティブ・ラーニング化だけでなく、業務の大幅な効率化、簡素化、ペーパーレス化にもつながっている。

3.3.3 オンライン多読教材「XReading」の活用と記録管理

コロナ禍に対応した上記オンライン指導体制（3.3.2）整備の一環として、2020年度より多読教材のXReadingを学生に購読させ、読書語数などの多読活動をオンライン上で記録・管理している。Xreadingはオンライン上の多読サイトであり、英語が母語でない外国語学習者のために使用語彙や

文法を段階別に調整したGraded Readerと呼ばれる書籍に特化している。2021年11月段階の収録図書は1500冊程度で、アカウント取得と同時にPCやスマートフォンなどから多量の本にアクセスすることができるようになる。1ヵ月600円を基本に、契約期間に応じて割引があり、学生はアクセスカードをテキスト同様に売店で購入し、そこに載っているアクセスキーを入力することで簡単に利用を開始することができる。本研究の対象者は必修科目受講者であったため、通年の割引カード(2400円)を購入させて活動を長期休業も含めた年間で継続することができている。学習者向けの主な機能としては図書検索や読みやすさレベルなどによるソート機能、読書履歴閲覧などがあり、ほとんどの書籍に付属している音声には上下20%までの速度調整も付いている。図書一覧にはタイトルや総語数以外にも、本の表紙写真や英語での要約、対象年齢などが示されるので選書段階から楽しみながら取り組むことができる。履歴機能には読んだ本の情報が総語数や読書時間だけでなく、読書スピード(wpm)、リスニング時間、クイズ正解率などと共にポートフォリオになって示される。教員も担当する学生の学習状況を同様に全てモニター・管理できる。筆者の授業中の働きかけについては後述(3.4.2)するが、「口コミレポート」と称して、学生が他の学生にも勧めたい、読んで面白かった、ためになったと思う本をお勧めの理由(英語)とともに紹介させる。この課題をほぼ毎回全員に提出させ、そのレポートを授業で紹介することで、自律的・自発的多読を促している。

3.4 授業内での教師と学生の動き

3.4.1 典型的な授業の流れ

1コマの授業(90分)の流れは大まかに「前時の復習・テキスト読解(インプット)・音読活動(インテイク)・自己表現活動(アウトプット)・多読・課題提出」の構成で、中盤のインプット・インテイク・アウトプットを、前時からの流れからその時々で組み合わせながら進めている。多読活動の時間をなるべく授業内に確保することで、自宅や移動時間での多読活動につなげるという意図があり、授業の最後(高瀬, 2010, p.100)になるべく20分程度の多読活動を取り入れるようにしている。

3.4.2 多読活動の手順

授業内でXreadingサイト上での多読活動をする際に、LMS(Googleクラスルーム)を通じて「口コミレポート」と称する課題(図2)をGoogleフォームで配信し、LMS上での締め切りを次時の前夜23:59に設定する。学生は他の学生向けにお勧めの理由とともに面白かった本を紹介する。ほぼ毎回課題として提出させ、次の授業で教師がスライドで紹介(図3)する循環を作っている。レポートの質問項目は、ペンネームを書く欄も設け、授業で提示する際は氏名を伏せて紹介している。報告項目としては「本のタイトル」以外に、「オススメ度」や「読みやすさ」(いずれも「かなり!」、「まあまあ」、「いまいち」、「ぜんぜん」からの4段階選択)の他に、サイト上で示される「本のYL(読みやすさレベル)」「本の総単語数」「読み終わるまでにかかった時間の合計」(約10分刻みのプルダウン選択式)、「オススメの理由」(自由記述)からなる。

「オススメの理由」の記述は、高瀬(2010)を参考に、使用言語を指定せず、日本語でも良いが英

語ならなお良いと指示している。学生からの投稿のうち、英語で出てきたものを、表現を分かりやすくparaphraseしたり、文法の誤りをさりげなく修正してrecastしたりしながら指導していたところ、英語での記述が徐々に増えた。その分析結果については5.3.3で詳述するが、他者におすすめの本を紹介するというこの自己表現活動を有意義とする回答が多かった。このような学生同士の情報交換の機会を授業で作成、「口コミレポート」課題をGoogleフォーム（図2）で配信したのち、個別の多読活動を行う。本実践では前述（3.3.3）した教師用のモニター機能を活用して、読了語数を飛躍的に伸ばしている学生を匿名で紹介するなどして、他の学生にも刺激を与えている。ライブモニター機能もついており、例えば授業中に多読が進んでいない学生を見かけると、選書レベルを下げるようにさりげなくアドバイスするようにしている。

図2 「口コミレポート」のGoogleフォーム課題

Pen Name	たいき	ま	らばんぼら	鼻がかゆい
Book Title	Think Daniela!	It's Natalie Nevada	Ring Ring..No Answer	Why
オススメ度	かなり!	かなり!	まあまあ	かなり!
読みやすさ	かなり!	かなり!	かなり!	かなり!
YL	3	3	3	3
Number of words	1533	333	380	2113
Finishing Time	11~20分	1~10分	1~10分	21~30分
My recommendation	Daniela was a very kind person and warmed my heart while reading the story.	I felt that good luck would come if I did good things.	The reason I recommend it, the kindness of the cleaner was very good.	The book is very thought-provoking.

図3 「口コミレポート」の授業での紹介スライド
(装丁はXreadingサイトより転載)

3.4.3 音読活動の手順

多読教材と対極にある精読用のテキストについては、せっきく理解した素材を有効活用する意味で音読活動を十分に行い（インテイク）、個々の音素の発音や英語特有のリズムなど、基礎技能の定着を図っており、それを評価するための実技テストを授業中に行っている。前期の音読活動や実技テストには例えば、英語チャンクを答えるチャンク・リーディング、シャドーイング、メトロノームに合わせてチャンクを発音するリズムリーディングなどが挙げられ、基礎技能の定着とプレゼンテーションの初期段階までを到達目標として求めた。後期については、聴衆とのコミュニケーションを意識した、より実践的なプレゼンテーションや英検受験を想定した対面でのインタビューテストまで到達レベルを高めている。自律学習を促すため、ペアで練習をして教師の所へテストを自主的に受けに行く形式とした。評価には3観点のルーブリックを用意して学生に先に提示し、練習用の音声や動画をGoogleクラスルームにアップロードし、移動中でもイヤフォンで練習できる環境を作っている。このような指導と評価を一体化できる素材パッケージをいつでもどこでもアクセス可能なLMS上に置くことで、学生の自律学習を促すだけでなく、他の教員とゴールを共有し連携を強化することにもつながっている。

3.4.4 自己表現活動で作るinput for outputの循環デザイン

授業構成はinput for outputによる技能統合を重視し、各ユニットの最後のアウトプット活動に向けてインプットを逆向きにデザイン (Wiggins & McTighe, 2005) している。前述 (1.3) したように、テキストを読んで終わりではなく、活動に目的・場面・状況を設定し、学生に「何のための内容理解なのか」「この発信は誰に対して行っているか」などの目的意識を持たせている。例えば、精読用テキストの理解 (インプット) を促進するため、ユニットのテーマに関するエッセイ・ライティングなどのタスク (アウトプット) をユニット毎に設定し、そのための内容理解を逆向きにデザインする。その学生のアウトプットを授業スライドに組み込んで紹介 (インプット) すれば、それに対する学生の反応 (アウトプット) をさらに引き出すことが可能である。また、Xreadingの「口コミレポート」は他の学生へオススメを紹介するという趣旨なので、まさに他の学生が発信内容を読む必然性が生まれる。学生から口コミ評価の高かった書籍リストをランキングにして示したり、オススメの書籍に関するプレゼンテーションを提出させて掲載し、さらにそれに対する共感度の投票や読了コメントを募集したりすることで、学生同士のコミュニケーションの循環をLMS上でも創出できる。その他の自己表現活動として、テキストの絵や図を元にしたリプロダクションに自分の意見を追加する簡易的なプレゼンテーションや、テキストに出てきた単語から学生に作らせた英定義のクイズなどが挙げられる。

3.4.5 授業後の教師の動き

授業終了と同時に授業動画やスライド、課題のアップロード・投稿を行う。すぐに今日の授業を振り返る機会を受講者に確保するためと、欠席者へ次時の連絡をするという目的がある。他の担当者も、それらの投稿状況から、その日の授業がどのように進められたかが容易に把握でき、必要な投稿をGoogleクラスルーム上でコピーして再利用することができる。それによって授業準備や指導、チームでの打ち合わせが効率化する。

4. 研究方法

4.1 研究対象

本研究の対象は、新潟経営大学経営情報学科1年次生 (2021年度) で、必修科目「ジェネラル・イングリッシュI (初級)」及び「ジェネラル・イングリッシュII (中級)」受講者の約71名である。口頭でインフォームドコンセントを求めた上で下記の調査を実施した。

4.2 多読総語数

Kanda (2013) 等の報告を参考に、参加者の読書行動の指標には音読速度調査ごとの読了語数を利用する。読了語数については、前述 (3.3.3) したXreadingの記録管理機能により、対象者全員の読書記録データを、指定した任意の時間まで遡って得ることが可能である。

4.3 音読速度調査

1.2で触れた音読力と英文読解力の相関関係を前提に、音読速度（wpm）を本研究の読解力の指標とした。測定は日本英語検定の面接試験で使われているパッセージ（約200語）から作成した音読シート「音読オリンピック」A・B面（付録8.2参照）を使用した。参加者はペアになってパッセージを制限時間内に音読し、ペアの相手が経過時間15秒の測定と音読総語数をカウントする。読めたところまでの総語数をシートの両面に記録し、同じ結果をGoogleフォームで提出させ、受講者71名から回答が得られた。A・B両面の結果の合計を2倍してwpmを求め、各回の全体平均を比較した。

4.4 授業アンケート

事前にインフォームドコンセントを求めた上で、Googleフォームを送信してアンケートを実施した。対象は受講している学生71名で、そのうち69名（97.2%）から回答が得られた。質問項目は大まかに3つのセクション「多読活動」、「音読活動」、「自己表現活動」からなっている。選択式の質問については「レベル5（5点）」から「レベル1（1点）」までの5段階リッカート尺度とし、学生の授業への感想を量的データだけでなく、質的に分析するために、各セクションの最後に記述式の質問を設けた。

5. 結果と分析・考察

5.1 多読総語数

表1 読了総語数の平均推移

Period	04/16～05/10(n=71)	05/11～06/21(n=71)	06/22～07/12(n=71)
M	5127.7	16079.1	4741.3
SD	4330.1	10750.4	5497.3
最大値	16,220	42,486	23,154
最小値	194	214	0

多読総語数は約3ヶ月で一人当たり平均2万6千語程度となった。5・6月には「音読オリンピック」までに「一定レベルの書籍を読破する」「総語数を増やす」という目標を持たせ、締め切りを設定した。その結果、その期間の全体の読了総語数が伸びたが、その直後の期間では逆に伸びが低くなる結果となった。

5.2 音読速度

授業進度に合わせて月に1回程度、音読速度を前述（4.3）の「音読オリンピック」で測定した。結果（表2）は測定1回目の平均が137.8語、2回目が153.6語で伸び率が約11.5%と今回の調査で最大となり、3回目が161.4語で約5.1%、4回目が164.0語で約1.6%、それぞれ伸びたことになる。前述した宮迫（2002）の報告より、今回明らかになった音読速度の伸びから、英文読解力の向上についても期待できる場所である。ただ、個人間のばらつきは大きく、1・2回で比較した際の伸び

率も、最大の学生が+62.0%（94語→152語）、最低は-15.3%（170語→144語）となっている。黙読より音読のほうが速いという結果となっているが、その理由として、音読テストという設定上、対象者が意味理解よりも音声化することを優先していることが考えられる。

表2 音読速度

wpm	測定1回目(4/16) (n=71)	測定2回目(5/11) (n=69)	測定3回目(6/22) (n=68)	測定4回目(7/13) (n=61)
M	137.8	153.6	161.4	164.0
SD	25.6	26.4	26.2	28.8
最大値	194	218	230	222
最小値	86	88	100	104

5.3 学生アンケート

5.3.1 多読活動に関するアンケート結果

多読の際の【Q1】「理解に関する自己把握」、わからないところがあった場合の【Q8】「辞書調べ」、【Q9】「未知語の意味推測」、本が自分にあわない場合【Q10】「頑張って読み進める」かどうかなどについて、アンケート実施時点での読了総語数の上位10名と下位10名を抽出し、回答（1～5）の平均値でクロス比較したところ、以下のような傾向が見られた。（表3）

表3 多読活動に関するアンケート結果の読了語数による上位・下位群クロス比較

質問	下位10名の平均 (a)	上位10名の平均 (b)	(b)-(a)
Q1. 自分が文章を理解しているかどうかをきちんと把握できる。	3.1	4.2	1.1
Q8. わからないところがある場合は、知らない単語を辞書などで調べる。	3.8	3.1	-0.7
Q9. わからないところがある場合は、知らない単語の意味を推測しながら読み進める。	3.5	3.9	0.4
Q10. 本が自分にあわないなと思っても、集中しようとかんがべて読み進める。	3.3	4	0.7

【Q1】「理解に関する自己把握」については、読了語数上位群が1.1ポイントの差で下位群を大きく上回り、多読が進めば進むほど自己の理解をモニターしながら読書活動を行なっている傾向が見られた。また、【Q8】「辞書調べ」では、下位群ほど辞書を調べて読んでいく傾向が見て取れ、そのことは【Q9】「未知語の意味推測」の結果とも一致している。つまり、読了語数上位者ほど「多読3原則」（1.1）のうち「①辞書は引かない」、「②わからないところはとばす」を忠実に実践していることになる。逆に、「③あわなくなったらやめる」に関しては、【Q10】の差異が0.7と比較的大きく、本があわなく感じても、「頑張って読み進め」ようとする傾向が上位者に強いことが明らかになった。これは今後の上位者の指導に大変有益な情報である。

5.3.2 音読活動に関するアンケート結果

音読活動に関するQ24～26の質問も同様に、読了語数上位・下位群でクロス比較したところ、以

下のような傾向があった。(表4)

表4 音読活動に関するアンケート結果の読了語数による上位・下位群クロス比較

質問	下位10名の平均 (a)	上位10名の平均 (b)	(b)-(a)
Q24. 周りの人に音読を聞かれるのが気になる。	3.3	2.1	-1.2
Q25. 間違っって発音するのが恥ずかしい。	2.7	2.3	-0.4
Q26. 単語の間を繋いで読むのが難しい。	3.6	2.8	-0.8

【Q24】「音読を聞かれ気になる」は、読了語数下位群が1.2ポイントの差で上位群を大きく上回り、周囲の目を気にしている様子が見て取れた。これはおそらく【Q25】「発音の間違いが恥ずかしい」と関連して、自身の発音への自信のなさの表れであると思われる。また、【Q26】「単語を繋いで読む困難さ」については、下位者ほど単語レベルの発音に意識が集中してしまい、「音読オリンピック」や音読の実技テストにおいて、流暢に発音できないと感じているということが推測される。これは記述回答において、下位者ほど、単語レベルの練習を重視していると答えていることとも一致した。この発見も、今後の下位者の指導に大変有益であると言える。

5.3.3 自己表現活動に関するアンケート結果

前述(3.4.4)した様々な自己表現活動について下記アンケートを実施した。【Q30】「自身の英語力向上に役立つもの」での注目すべき結果として、日常的に行なっている多読の「口コミレポート」が29票で、災害に関するプレゼンテーション活動に次いで第2位につけていた点が挙げられる(図4)。

Q30. どの自己表現活動が自身の英語力向上に役立っていると感じましたか？(複数回答可)

68件の回答

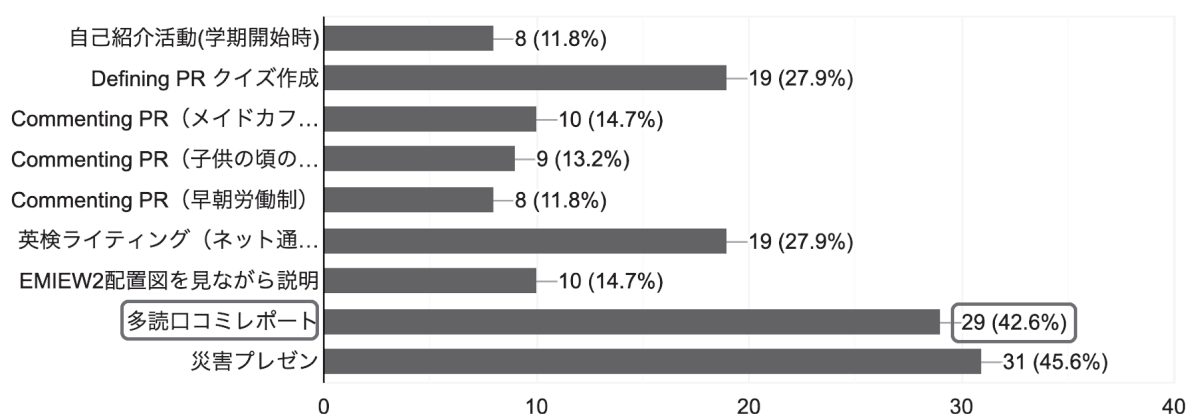


図4 「自己表現活動の中で自身の英語力向上に役立つもの」

この結果の理由を明らかにするため、記述回答から関連する項目を抽出した結果、有効回答71件中17件(24%)が、多読「口コミレポート」に関して記述していた。理由に関連するものを以下に挙げるが、最も多かったのは、「自分」というキーワードであった。(下線と太字による装飾と)

内は筆者による加筆)

【Q31】上記自己表現活動のうち、特にどの学習がどんなふうに英語力向上に役立ったと思いましたか。

- 口コミレポートは完全に自分で一から書くので役立つのではないかと思います。
- 口コミレポートが自分の感じたことを英語で表現することに役立ちました。
- 自分の考えを英語で表現するのは単語や文法を覚えられるし、楽しかった。
- 自分が興味を持った事について考えて書く学習方法
- 多読口コミレポートで自分が読んだ本の内容を英語で表現するので力がつく。
- 口コミレポートでは自分の感想を英文にするため、英語力が向上した。
- 口コミレポートで自分で考えるので役立つと思っています
- 多読のクチコミで自分の感想を書くことで表現力が育っていけると思う。
- 短文でも、率直な感想を英語で書ける言える (原文ママ)

上記の記述について、3名の学生に口頭で追加インタビューした結果をまとめると、「『自分が』経験した読書レポートを」、「『自分の』考えを他者へ向けて率直に」、「ライティング練習などのあるモデルを頼りに書くのではなく、『自分で』伝えようとしていることが役立っている」という趣旨であった。

次に多かった記述は、学生同士の学び合いに関する回答である。

- 口コミレポートは、他の人の文章を見てどのような感想をもったのか、どのような文章で伝えられるのかの勉強になる。 (原文ママ)
- 口コミレポートで様々な表現技法を学ぶことができた
- (自分は)文章表現が乏しいので(他者の英語が)参考になる。
- 多読口コミレポート 内容が面白く読んでいて英文が分かってくる
- 口コミレポートは英語で書くことでどうやっておすすめを人に表現するか考えるため英語力が向上すると思う。
- 多読口コミレポートの活動で自分の気持ちや感想を英語にすることに苦手意識がなくなってきた。

これらのコメントは読了語数の下位群に比較的多く見られたが、最後のコメントは最上位の学生のものである。また、追加調査として音読オリンピックや読了語数測定を行った日程と最も近い授業での口コミレポートの記述が日本語・英語どちらで書かれていたか、件数の調査(表5)を行った。すると、上述のコメントを裏付けるように、初回4/16からの授業では56.2%の学生が英語で書いていたものが5月では一旦52.6%に減ったものの、その後顕著に増え、最終的には7/13からの課題提出で88.6%とほとんどの学生が英語で記述しており、初回から比べると32.4%の伸びとなっていることが今回の調査で明らかになった。

表5 「口コミレポート」記述の日本語／英語の比較と推移

	4/16～ (n=80)	5/11 (n=78)	6/22～ (n=69)	7/13～ (n=70)
日本語記述数	35	37	15	8
英語記述数	45	41	54	62
日本語割合 (%)	43.8	47.4	21.7	11.4
英語割合 (%)	56.2	52.6	78.3	88.6

これまで示してきたように、4ヶ月の多読・音読・自己表現活動を通じて、読了語数が一人当たり平均2万6千語となる中で音読速度(wpm)が平均で26.2語伸び、英語で発信する学生が3割増加してほぼ9割に達し、英語での自己表現活動でライティング力が飛躍的に向上し、自信の度合いが高まっていることが示唆された。活動のデザインがinput for outputになっており、伝える相手がいるからこそ手段として英語を使うことに意味が生まれていると推察される。「自分で」アウトプットした後では他者の発信内容にも関心が生まれていると言える。「相手に伝わった」「他者に影響を与えることができた」という成功体験から自信をつけていることが示唆されている。

6. 結論

本研究では大学における英語基礎科目で行っている多読・音読・自己表現活動にフォーカスした実践を報告し、学生の多読状況や音読速度テスト、アンケート結果などのデータから、効果の検証を試みた。研究対象者は授業履修者の学生71名で、多読活動での読了総語数、音読速度、アンケート調査での数値及び自由記述に加えて口頭の追加インタビューを分析対象とした。1つめの多読活動に関する調査の結果、読了総語数は約3ヶ月で一人当たり平均2万6千語程度となり、その間、音読速度(wpm)が平均で26.2語伸びたことから、英文読解力が向上したことが示唆された。また、読了総語数とアンケート調査のクロス集計により、多読総語数が上位の学生ほど、「多読3原則」に従って未知語に出会っても辞書を使わずに意味を推測して読み進めている傾向が見て取れた一方で、逆に本が自分に合わないと感じても、集中しようと頑張ってしまう現状も明らかになった。2つめの音読活動については、読了総語数が下位の学生ほど、間違った発音をしているのを聞かれるのが恥ずかしいと感じており、情意面、特に自身の発音への自信のなさの現れであると推察されるため、今後の指導で配慮すべきである。3つめの自己表現活動については、「口コミレポート」を自主的に英語で発信する学生が32.4%増加して9割近くに達したことに加えて、アンケートの自由記述からも、他の学生におすすめの本を紹介するという活動を有効だと捉えている学生が多く、目的・場面・状況が明確に設定された活動での成功体験を通じて、英語発信に関する自信が高まっていることが示唆された。だが一方で、多読総語数の伸びには個人差が大きく、また教師から目標を明確に示して締め切りを設定すると、その期間終了後には語数が伸びなかったため、高瀬(2010, p.180)が示すstrong encouragementの方法については、筆者の実践における今後の課題と言える。

本実践及び研究を通じて、学生の読解力の伸びや、自己表現活動への自信の度合いの向上が見られ、多読・音読・自己表現活動にフォーカスを当てた指導の有効性が示唆された。実践的なコミュニケー

ション能力の育成、及び音読や自己表現活動に関する自信を高めるには長い時間がかかるだろう。今後、このような活動をさらに継続し、学生の英語力及びコミュニケーション能力を育成する授業の開発をさらに推進したい。また、このような実践は大学に留まらず小中高も交えて実施することで、日本人のコミュニケーション能力とグローバル社会で活躍する人材の育成が促進されると期待される。小中高大で一貫した英語学習を推進することにより、英語教育改革推進のための足掛かりを作りたい。

7. 引用文献・参考資料

- 阿部雅也. (2021). 生徒が主役！英語科チームで協働・共創するための10のチェックリスト. 英語教育 4月号, 大修館書店. 26-27
- 飯野厚. (2006). 音読と多読が読解力と読解ストラテジーに及ぼす効果. 清泉女学院短期大学研究紀要, (25), 51-69.
- 和泉伸一. (2009). 『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』 大修館書店.
- 和泉伸一. (2011). 「第二言語習得研究からみたCLILの指導原理と実践」 渡部良典, 池田真, 和泉伸一 (共著) 『内容言語統合型学習：上智大学外国語教育の新たな挑戦』 (pp. 31-72). 東京：上智大学出版.
- 大槻きょう子・高瀬敦子. (2014). 多読用図書教材としての L1 児童用英語絵本の人気の秘密：文科省英語教科書と比較して, 多読学会紀要, (7), 10-38.
- 門田修平. (2007). 『シャドーイングと音読の科学』 コスモピア.
- 斎藤栄二. (2008). 『自己表現力をつける英語の授業』 三省堂.
- 高瀬敦子. (2010). 『英語多読・多聴マニュアル』 大修館書店.
- 中嶋洋一・直山木綿子・久保野雅史. (2017). 『プロ教師に学ぶ真のアクティブ・ラーニング』 開隆堂出版.
- 長谷川修治・中條清美・西垣知佳子. (2018). 中・高英語検定教科書語彙の実用性の検証. 日本大学生産工学部研究報告B, (41)2, 49-56.
- 宮迫靖静. (2002). 高校生の音読と英語力は関係があるか?. STEP Bulletin, 14, 14-25.
- Hoover, W., & Gough, P. (1990). The simple view of reading. *Reading and Writing*, 2, 127-60.
- Kanda, M. (2011). The significance of word count in long-term extensive reading. 『言語文化社会』 9, 127-142.
- Krashen, S.D. 1982. *The Input Hypothesis*, Longman.
- SSS英語多読研究会, 「英語で読書を楽しむ三原則」 Retrieved on Nov. 5th, 2021 from: <https://www.seg.co.jp/sss/learning/>
- Wiggins, G. P., & McTighe, J. (2005). *Understanding by design (Expanded 2nd ed.)*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development.

8. 付録


8.1 担当者間で共有する授業進度表（イメージ）

2021前期授業計画表

全学年コース / 曜日	第1週			第2週			第3週			第4週													
	4/9	4/10	4/11	4/12	4/13	4/14	4/15	4/16	4/17	4/18	4/19	4/20	4/21	4/22	4/23	4/24	4/25	4/26	4/27	4/28	4/29	4/30	
自入室通少 前部	1			2			3				4				5				6				7
第1回 自入室 冬・アイス ホール・イン トロイ				第2回 (学修予 習オリ)			第3回 (Visual 聴取)				第4回 (視覚・聴 覚的・TF・ Chunking Paradise)				第5回 (聴・英 パフォー マンスフ ォルマス ス)				第6回 (聴・英 アセス メント ト)				第7回 (視覚聴 覚的・X RF・公 コイテ 英語運用)
A月1番1 ○○年生	2021/4/9 休講			1			2				3			4				5				6	
C月2番3 ○○年生	2021/4/9 休講			1			2				3			4				5				6	
D月3番4 ○○年生	2021/4/9 休講																					6	

8.2 音読速度測定用のハンドアウト例

【Side A】
音読オリンピック 月 日 () 学籍番号 氏名



Result

words/15 sec

Google Form と同じ記録を本日中に提出

15秒で合図のあった本文箇所にて/(スラッシュ)記号	行末の累積語数	15秒で読めた合計語数が何
On Saturdays, people often have some free time.	8	
Many people go out and spend time with their friends on Saturdays, but some people like to stay home and relax. Saturdays can be fun.	17	
In Japan, many people enjoy eating fish. Fish tastes good when it is fresh, so it is sold at markets early in the morning. Eating fish can be very good for your health.	33	
The Winter Olympic Games are an international sports event. People from many countries try hard to win a gold medal. Snowboarding and skating are exciting to watch, so they are enjoyed by many people.	66	
	73	
	81	
	89	
	100	

計算例：
The Winter Olympic Games are an international sports event. People from many countries try hard to win a gold medal. Snowboarding and skating

7
15
15+2= 17